

# 2026年度

## 国語

最初に、以下の注意事項をよく読んで下さい。

1. 問題冊子は監督者の指示があるまでは開かないで下さい。
2. 監督者の指示にしたがって、解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。問題冊子は受験番号のみを記入して下さい。
3. 試験問題の内容に関する質問には応じません。それ以外の用事があるときは、手をあげて下さい。
4. 受験中気分が悪くなったときは、監督者に申し出て下さい。
5. 問題冊子および解答用紙は持ち帰らないで下さい。
6. 字数制限のある問題については、句読点なども1字として数えるものとします。

受験 番号	
----------	--

【一】 次の各問いに答えなさい。

問一、次の①～⑥の傍線部のカタカナを漢字に直し、漢字には読みがなを書きなさい。

- ① 本は知識のホウコだ。
- ② ジュウナンに対応する。
- ③ ハテンコウな試みを完遂する。
- ④ 私語をツツシむ。
- ⑤ 子どもを溺愛する。
- ⑥ ユウガに振る舞う。

問二、次の中から「破顔一笑」と似た意味を表すものを二つ選び、記号で答えなさい。

- ア、糊口こしうをしのぐ
- イ、表情を緩める
- ウ、ツボにはまる
- エ、えびす顔になる
- オ、抱腹絶倒

問三、次の（ ）には「状況の変化に応じてうれしさを感じたり心配になったりする」という意味の四字熟語が入る。その四字熟語を漢字で答えなさい。

試合の途中経過を聞いては（ ）する。

問四、次の（ ）に適切な漢字二字を入れ、慣用句を含む文として完成させなさい。

- ① 幼い弟はいたずらばかりで（ ）に負えない。
- ② 小学校の同窓会に出席して、（ ）を温めた。

【二】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「ああ、もうなんでこの投稿全然伸びなかったんだろう。最悪」

「えっそんなことないでしょ、800いいねもついでるじゃん」<sup>注1</sup>

「そうだよ、私なんていつも50いいねくらいしかつかないんだから」

「私なんて3いいね、あつ鍵垢<sup>注2</sup>だけど」<sup>かぎあか</sup>

そんなことを言われても、私の投稿をそんじよそこの女子高生と一緒にしてほしくない。

「この前海で撮ったのはバズ<sup>注3</sup>って、7000いいねくらいついたんだよ」

「海は映えるからねえ、夕日<sup>注4</sup>つてのもきつと良かっただろうし」

「それにあの時着てたワンピ<sup>注5</sup>可愛<sup>かわい</sup>かったもんね」

「背景の海もびったりだったからね、やっぱり海強いなあ」

海とか夕日とかファッションとか、そんなことはどうでもいい。私が写っていることに価値があるのなら、あの時と同じよう

に今回もバズるはずだった。

「ああ、幸せになりたい……」

「出た」

「梨花<sup>りか</sup>の口癖」<sup>か</sup>

「まあ不幸になりたい人なんていないよね」

うるさい、と思ったけどそんなことは言えないので胸の中にしてしておく。でも幸せになりたいが私の口癖なのは確かだ。

1 した時に口をつけて出てきてしまう。

投稿がバズった時は本当に幸せを感じる。知らない人に「可愛い」とか「素敵だね」とか言ってもらえると、有名人になった気がした。あの瞬間はとてつ満たされる至福の時だ。

でもその幸せはあっという間に薄れてしまう。SNSの賞味期限は短い。一日の間にバズりなんて至るところで起きているし、私の投稿もすぐに流されてしまうのがオチだ。それどころか、私のものよりいいねがついている投稿を見つけてしまうと、それだけでテンションが下がる。

私も早く次のバズる投稿をしなければいけない。こういうのは鮮度が大事だ。2二の矢、三の矢を放っていかなければならない。大変だけど、それでバズれば私はまた満たされる。そのための苦勞は厭aわないつもりだった。

「この人とか凄すいよねえ」

「ああ、チバイオリンさんヤバイよね」

「私も注6フオーローしてる！」

友達が話題にしたその人の名前は私も知っていた。

「チバイオリンさん毎回バズりすぎ、演奏上手すぎるし雰囲気も格好いいから、どっかのアーティストが正体隠してやってるって噂うわさだけど……」

チバイオリンさんは、仮面をつけてバイオリンを超絶技巧で弾く人気注7のインフルエンサーだ。その正体は謎に包まれているが、音楽センスは素人目から見ても本物だ。当初は有名アーティストの流行曲をカバーするところから人気に火がついたが、今は『黒雷』『故郷の母』などのオリジナル曲も発表して話題を呼んでいる。でもチバイオリンさんはあまりにも凄すすぎて私のライバルにはならなかった。そもそも（I）が違う気がする。

「……まあ私が楽器とかできる訳ないけどね」

「そうだよね、梨花は楽器何もできないもんね」

「どうかカラオケも下手だもんね」

「音痴が可愛いってのもあるけどね」

「うるさい」

小さな笑いが起きて一瞬の間が空く。

結局根本的な解決策は何も思い浮かばなかった。立派なインフルエンサーの道は

3

遠い。

「ああ」

私がその言葉を漏らしたところで友達<sup>が</sup>言葉を続けた。

「幸せ」

「に」

「なりたい」

「うるさい」

また同じようにツツコミを入れるときつきよりも大きな笑いが起きた。

少しは気分が良くなったけど、幸せという感覚にはまだ程遠い。

放課後、一人SNSのネタ探しのために廊下を歩いていた。学校と制服はSNSとの相性が良い。こんな風にみんなと同じ服を着て同じ場所で過ごす時間なんて、人生でもそうそうない。だからこそ、この場所と時間を利用して、バズるような投稿をいくつも生み出したかった。

「あっ」

目に入ったのは、廊下の窓の施錠<sup>せじょう</sup>をしていた平<sup>たい</sup>さん<sup>いら</sup>だった。普段生徒とは関わりのない校務員さんだけど、生徒からは人気があって、尊敬の意味が込められているのか、人生<sup>じんせい</sup>先生と呼んでいる人もいる。名前が人生<sup>じんせい</sup>というのが一番の由来みたいだけど、相談をすると他の先生は言わないようなアドバイスをしてくれると評判だった。あと、見た目が格好いい。

「ふうん……」

窓からの夕日が斜めに当たって、それがどこか叙情的な雰囲気<sup>きふう</sup>を漂<sup>ただよ</sup>わせている。

——カシヤツ。

スマホで写真を撮った。

その音に気づいて、平さんが私の方を見る。

「今、撮りましたか？」

「だめだった？」

「ええ、だめです。消してください。そんな風に盗撮されて気分が良いことなんてありませんから」

「盗撮だなんて、結構良い写真が撮れたのに」

相手からだめと言われては写真を消すしかなかった。「#イケメン教師」って投稿すれば、バズったかもしれないのに。

「じゃあ代わりにバズりそうな写真が撮れるスポット教えてよ」

平さんはほんの少し考えるような顔をしてから言った。

「そうですね、もう少ししたら校舎の中庭は見応えのある場所になると思いますよ。その時はぜひたくさん写真を撮ってほしいです」

「校舎の中庭？ そこに何があるの？ どうせ花とかでしょ？」

「もちろん花もありますが、それだけではありません」

「へえ、そう……」

所詮学校の中庭だ。花以外に見どころがあつたとしても、わざわざ写真を撮るような場所ではない。

「どうして来栖くるすさんはそんなにバズることを目指しているのですか？」

私は質問に答える前にその言葉に驚いてしまった。

「えっ、なんで私の名前知ってるの？」

私がこうして平さんと話すのは初めてのはずだ。それなのに、なぜ……。

「私のもとに相談に来た人が、あなたの名前を出したことがあつたんですよ。投稿がバズって、学校の中でもちよつとした有名な人になっているとかで」

「へえー、そうなんだ……」

……ヤバイ。嬉しい。表情には出さないようにしたけど、正直手を振り上げて喜びたいくらいだった。なんか今すごい満たされている気がする。これだよこれ。幸せって感じ。あの投稿がバズったおかげで②こんな気分を味わうことができたんだ。やっぱり最高だ。必ずまた新たなバズりを作らなきゃ……。

「えーっと、バズることを目指してる理由だっけ？」

平静を装ったまま再度質問を確認する。このままではニヤケ顔が出て来てしまいそうだったから。

「なんだろう、まあ他の友達が言ってるのは、承認欲求とかが満たされるって感じかな。SNSだとそれでたくさんの人から認められて幸せに感じるみたいな」

自分で思っていたことだけど、この場は友達が言っていることにした。まるっきり嘘という訳ではない。実際にこう言っている子はいたから。

「SNSでたくさんの人から認められると幸せ……」

でも平さんは要領を得ない感じでそう呟いた。

「何か？」

「いえ、だとしたらSNSの中で幸せな人は、いわゆるインフルエンサーと呼ばれるごく少数の人だけになってしまいましたか？」

「それは……」

そう言われると少し話が難しくなってくる。SNSがインフルエンサーのためだけにあるとは、私だって思っていない。

「いや、だから今のはあくまで私の個人的な意見だから」

「さっき友達が話していたと、言っていますんでしたか？」

「な、ぬ……」

……墓穴を掘ってしまった。なんだか調子が狂う。こんな変なところを突いてくる相手は私の周りにはいなかった。もっと、なあなあにやり過ぎせたはずなのに……。

平さんは、私を見つめてから言葉を続ける。

「来栖さん、幸せと不幸せってなんでしようかね？」

③ 「ああ、もう……」

放課後の友達の誘いも断った。頭の中で平さんの言葉が邪魔をしている。

「……」

ただ写真を撮っただけなのに、いつの間にか幸せと不幸せが、どうこうとかいう会話になった。もしかして平さんに相談をしている人は、みんなあんな訳の分からない話をしているのだろうか。

それなのに人気があるのだから不思議なものだ。私は平さんに今後相談をする気なんて起きなかった。

でもそんな風に平さんのことを考えていると、自然と校舎の中庭に足が向いていた。もう少ししたらここが見応えのある場所になると言っていた。ただこの場所でまた平さんには会いたくない。あの話を聞いた後で来たら、まんまとひっかかったみたいだ。なんかもう一回負けた気がする。だから見つからないように物陰から

4

様子を窺った。

——そこには、平さんと数人の生徒がいた。

「あれは……」

④ 中には見知った顔もいる。

「葉山さん……」

葉山さんはクラスメイトの女の子だ。私はほとんど話したことがない。葉山さんが誰かと話している姿もあんまり見たことがなかった。孤高と言ってもいくらいいの存在の女の子だ。孤独ではなく孤高という言葉が似合うのは、その見た目のせいだろう。葉山さんはどこか絵になるような大人びた美人だった。だからこそ私も一目置いていた。というか羨んでいるところもあった。あの見た目ならSNSを始めればすぐに人気が出るだろう。でも葉山さんはSNSに全く興味がないようだった。その余裕も含めて、私より上をいつている気がする。

それにしてもなぜこんなところに葉山さんがいるのだろうか。その理由はすぐに明らかになった。

「今日からピオトープ作りを始めていききたいと思います。顧問の先生とも話し合って、私が主導する形でみなさんと一緒にやらせてもらうことになりました。いずれ他の部の生徒たちも手伝いに来るとは思いますが、まずは代表として生物部のみなさんよろしく願います」

平さんがみんなに向かってそう言った。

「生物部……、ピオトープ……」

そういえば葉山さんは生物部に所属していた。そんな部に入っているのは、私の周りでは葉山さんだけだったから覚えている。それにピオトープという言葉もどこかで聞いたことがあった。確か、理科の授業だ。さまざまな生物が生きるための場所とか言っていた気がする。生物部の活動内容としても一致しているから間違いないだろう。

平さんは言葉が続けた。

「最終的にはここに水を張って、水生植物と共に多くの生物が住めるような場所を作りたいと思います。まずは水を溜めるための穴掘りがメインになりますし、力仕事も多いのでみなさん無理のない程度で頑張ってくださいませようね」

平さんの言葉に生物部の生徒たちが「はい」と返事をした。葉山さんは平さんの説明を受けて幼子のようにワクワクとした表情を浮かべている。あんな顔、クラスの中で一度も見ることがなかった。

冴えないジャージ姿。ダサイ軍手。手にはスコップ、そばには映えなんて一切ない雑草と土。

「よしっ」

「やるぞー」

「頑張らなきゃ」

生物部の生徒たちの声が聞こえてくる。地面に膝をついていた。私にとっては考えられないスタイルだ。虫が本当に無理だから絶対あんなことはしたくない。

「……」

ふと思い立って、気づかれないようにスマホのカメラを向けた。平さんの写真を撮った時のようにカシヤツ。

目一杯ズームして撮ったのは葉山さんだ。

肩のあたりに雑草と、そして頬に既に泥がついている。

葉山さんはそんなの何も気にしていないようだった。

真剣に土と向き合い、その綺麗な瞳は一点を見据えている。

そんな姿も、やっぱり私はクラスの中で一度も見ることがなかった。

(清水晴木『17歳のピオトープ』〈幻冬舎〉より)

注1・いいね……SNSなどで、投稿に対して興味や好感を持ったという反応を示すもの。

注2・鍵垢……SNSなどのアカウントで、特定の範囲にしか見えないようにしているもの。

注3・バズって……「バズる」は、SNSなどで話題が広がるという意味。

注4・映える……見栄えする。

注5・ワンピース……ワンピース。

注6・フォロワー……SNSなどで、他人の投稿を見られるようにその人のアカウントを登録すること。

注7・インフルエンサー……SNSを通じて情報発信する、多数の人に対して影響力のある人。

問一、

1

4

に入ることはとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、こつそりと      イ、どんどん      ウ、ひしひし      エ、ふと      オ、ふわっと      カ、まだまだ

問二、波線部 a・b の本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a 「厭わない」

ア、悪影響が生じる

イ、嫌がらずにやる

ウ、消極的に接する

エ、楽しさに変える

オ、勉強として行う

b 「墓穴を掘って」

ア、失敗の原因を指摘されて

イ、いい加減な対応をして

ウ、間違えたことに気づいて

エ、自分で立場を悪くして

オ、相手に主導権を持たれて

問三、( I ) に入ることばとして適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、勝手      イ、衣装      ウ、風潮      エ、荷物      オ、土俵

**問四、** 傍線部①「校舎の中庭は見応えのある場所になる」とあるが、具体的にはどのような場所になるのか。それがわかることばを、本文中から二十一字で抜き出し、初めと終わりの五字を書きなさい。

**問五、** 傍線部②「こんな気分」とあるが、それについて説明した次の文の空欄【 1 】・【 2 】に入ることばを、【 1 】は十五字で、【 2 】は十一字でそれぞれ本文中から抜き出さない。

【 1 】になれたと知ったことで得られた、【 2 】ほどの気分。

**問六、** 傍線部③『ああ、もう……』とあるが、このときの「私」のようすとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

1、平さんに自分が誤解されたことは不満であるが、誤解を解くために再び平さんと話するのは苦痛なのでどうすればよいか迷っている。

2、自分や友達の考えを平さんにすべて否定されたことが腹立たしく、友達にも合わせる顔がないほどに滅入るような気分になっている。

3、平さんに相談したところで何も解決しなかっただけでなくさらに悩みが増えてしまったので、相談したことを深く後悔している。

4、自分が幸せだと思っていたことが揺らいだように感じているうえに、平さんのペースで会話が進んでしまったことを悔しがっている。

5、平さんに言われたことについてゆっくり考えようとしているのに、幸せとは何かがわからなくなって混乱した状態に陥っている。

問七、傍線部④『葉山さん……』とあるが、葉山さんに対して「私」はどのような印象を持っているか。それを説明した次の文の【 】に入ることをばを四十字以内で書きなさい。

【 】を感じさせているという印象。

問八、傍線部⑤「ふと思いついて、気づかれないようにスマホのカメラを向けた」とあるが、そのようにした理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、汚れてみすばらしい姿をしている葉山さんが、いつもと違って滑稽に見えたから。
- 2、「わたし」にはできないことをする葉山さんが、妬ましくて憎らしいと思ったから。
- 3、平さんの話に素直に返事をしている葉山さんが、無邪気でかわいらしかったから。
- 4、これまで見たことのないようすを見せる葉山さんが、より魅力的に感じられたから。
- 5、真剣にものごとに取り組む葉山さんが、幸せを教えてくださいえるような気がしたから。

問九、本文中から読み取れる内容として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、SNSに夢中になるも満たされずにいる「私」の意識が、平さんと葉山さんによって変化しそうになっている。
- 2、SNS上の評価を重視する「私」が、異なる評価軸を持つ平さんや葉山さんのSNSに興味を持ち始めている。
- 3、SNSにとらわれた「私」が、平さんとの会話を契機にSNSを忘れるほど強く葉山さんに惹きつけられている。
- 4、平さんに相談しても悩みが解決しなかった「私」が、葉山さんの行動を参考にして答えを見つけようとしている。
- 5、平さんの言葉で価値観が揺らいだ「私」が、葉山さんの姿から幸せを見出し<sup>みいだ</sup>て安心した気分になっている。

### 【三】 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

注<sup>1</sup> プラトンは、生きた言葉が発せられることの重要性を強調している。それはより具体的に言えば、思慮深く選ばれた言葉が、特定の文脈において、特定のタイミングで、特定の人から特定の人に向けて、特定の身振りや表情や声色などとともに発せられる、ということだ。こうした特性は、文字で書かれ、さらに、印刷して大量にコピーされたものになるほど、おのずと失われていく傾向にあると言えるだろう。

1、その喪失はどういった問題を生み出しているのだろうか。プラトンの懸念を振り返っておこう。主に二点ある。

(1) その場ですぐに消え去る音声とは異なり、文字で書かれた言葉は長く残りうる。しかし、人が文字に頼り、記憶を文書や書物といった媒体に外部化するようになると、記憶力も知力も以前より弱まることになる。また、それにもかかわらず、表面上は物知りのように見せることができるから、過大評価とうぬぼれだけが高まった人間になってしまう。

(2) また、文字で書かれた言葉は長く残るので、それが記された当初の状況から離れて一人歩きし、しばしば不特定多数の人の目にも曝<sup>さら</sup>される。そして、意味を誤解されたり、部分的に切り取られて不当に批判されたり、あるいは過剰な反響を呼び起こしたりする場面がある。しかも、こうした<sup>①</sup>想定外の事態に<sup>きこ</sup>応答することができないという、孤立無援の制御困難な状態に置かれる。ちだ。

このプラトンの懸念は、彼が生きた二千数百年前のギリシアの社会にのみ当てはまることではない。その後の印刷技術の発達によって、文字で書かれた言葉がより速く、より多くの人々の目に留まるようになったことは、先に確認した通りだ。

2 現代では、録音や録画などの技術、ラジオやテレビ、インターネットなどの情報通信技術の驚異的な発達によって、文字だけではなく、発話時の音声や映像も、その場かぎりでは消え去ることなく残り続け、<sup>また</sup>瞬<sup>また</sup>く間に世界中に拡散されうるようになった。

そうした音声や映像には、声色やイントネーション、発声のリズム、身振り、発話された場所なども記録されているから、その時点で文字よりも情報量が多いとは言えるだろう。しかし、だからといって誤解や曲解などが避けられるわけではない。その音

声を聴いたり映像を見たりする人々の反応に対してさらに応答できない——自分で自分を守れない——という点では、文字と変わらないのだ。

それゆえ、かつてプラトンが示した種類の懸念は、いまや文字だけではなく、音声も含めた言葉全体に及んでいると言える。実際、誰かが発言した音声や映像が世間に広まって炎上<sup>注2</sup>し、取り返しがつかなくなるケースは枚挙にいとまがない<sup>A</sup>。

この点を踏まえて、まず、先の(1)の懸念について再び考えてみよう。現在私たちは、身の回りの物事の記録を、しばしばパソコンやスマホといった電子端末を用いておこなっている。それから、何か新しい事柄を知ろうとする際にもそうした端末を用いて、インターネット経由で情報を引き出し出している。たとえば、Googleなどの検索エンジンを利用したり、ChatGPTなどの生成AIに質問したりといった具合だ。<sup>3</sup>、YouTubeなどの動画共有サービス上で公開されている解説動画を見て知る、といったこともあるだろう。いずれにせよ、記憶の外部化は、プラトンの時代から現在に至るまで、その方法も規模も拡大を続けている。

それだけではない。現在私たちは、発話する(＝言葉を書き出す、言葉を書く)という行為自体も部分的に外部化できるようになった。<sup>4</sup>、自分の頭や口や手を使う代わりに、生成AIに文章そのものを書いてもらい、その文章を使って情報を発信したり質問に受け答えしたりすることが可能になったのである。

こうなると、情報や知識をわざわざ自分の頭のなかに蓄えるという手間をかけるのは無駄であり、それよりも、インターネットや生成AIなどの技術を活用する術を身につけるほうが賢明である——「コスパ(費用対効果)」や「タイパ(時間対効果)」がよい——という考え方も生まれうるし、現にそう主張する者もいる。しかし、本当にそうやって外部化一辺倒になってしまえば、私たちはそれこそプラトンの批判する、〈見かけだけは物事をよく知っていて、頭が良いように見えるが、実際には過大評価とうぬぼれだけが肥大した人間〉と化してしまおうおそれがあるだろう。

少なくとも、極端な外部化は次のような問題を生じさせる。まず、本やノートや電子端末などが手元にないとき、停電や通信障害が起こったりシステムがダウンしたりしたとき、あるいは、本や端末を開く時間もなく、その場ですぐ臨( I ) 応変に対応しなければならぬようなとき、私たちはまさしく無能になってしまおう。それから、幅広い知識を自分の頭のなかで自在に組

み合わせて思考をめぐらすといったことも、あるいは、新たに経験した事柄に対して、自分の頭のかなかにすでに入っている知識との関連性や類似性を見出す<sup>みだ</sup>といったことも、当然不可能になってしまう。記憶の外部化は人間の記憶力と知力を衰えさせるといふ、プラトンが懸念した問題は、現在では解消されたどころか、より深まっていると言えるのである。

では、(2)の「言葉の一人歩き」にまつわる懸念についてはどうだろうか。

現在私たちは、文字でも音声でも映像でも、SNSへの投稿などのかたちで瞬時に発信することができる。しかし、その発信した内容が不特定多数の人々に、それこそ世界的な規模で拡散され、いわゆる「炎上」状態になることも少なくない。すなわち、正しい理解に基づくものであれ、誤解や無理解に基づくものであれ、ひとつの投稿が猛烈な数の非難や称賛を巻き起こしながら一人歩きし、それらがより過激な投稿を誘発するといった事態は、現在では日常茶飯事だ。そして、そのような「炎上」状態になると、火元となる最初の投稿者本人はもはやほとんど手の施しようがない。追加で投稿をおこなって誤解を訂正したり補足をしたりしても、拡散を止めたり状況をコントロールしたりすることは難しいのである。

また、言葉の一人歩きは、こうした不特定多数への拡散というケースだけではなく、特定の相手に対して発信するという小規模なケースでも重大な問題を引き起こしうる。手紙であれ、SNSのメッセージやメール等々であれ、一度相手に差し出した言葉がどのように理解され、どういう影響を及ぼすかは定かではないのだ。

もっとも、かつて主流だった手紙のやりとりとは異なり、SNS上のやりとりは、数分とか数秒といった単位で次々に、延々と言葉を交わし合うことができる。とはいえ、それでも結局はどこかで切り上げなければならぬという点では変わりがない。たとえば、自分が発信した言葉でLINEなどのやりとりを一度切り上げるとき、その最後の言葉が相手にどう受け取られているかはもはや確かめられず、孤立無援の状態に置かれるのだ。

SNSでは、その不安や気まずさを打ち消すように、最後にどちらかが「👍」や「❤️」などのリアクションマーク、あるいは同様の肯定的な意味合いのスタンプ<sup>注4</sup>などを送信し、それで一連のやりとりが終わることも多いだろう。しかし、それらのマークやスタンプも、「グッド」や「いいね」といった意味をもつ記号の一種であり、記号を用いて相手に働きかける発話の一種である。そうである以上、その行為の意図も、それが及ぼす影響も、不明確さを免れる<sup>まぬか</sup>ことはできない。

さらに、言葉やリアクションマークやスタンプを返さないことも、それ自体が一個のメッセージになってしまふ。SNSでは、相手からの発信を読んだことが、その相手にすぐに知られうる。また、相手にすぐに返信することもできる。そして、そうであるがゆえに、いわゆる「未読スルー」や「既読スルー」のように、すぐに読まないことやすぐに返信しないことそれ自体が、相手に対する好意のなさや興味のなさなどを示す行為として受けとめられることがあるのだ。

実際、相手に送ったメッセージやメールの内容——あるいは、相手にそうしたメッセージやメールを送らなかつたこと——が、思いもかけず相手の誤解を招いたり、悪い印象を与えたりすることは少なくない。そして、そこから深刻なトラブルに発展したり、相手との関係が壊れてしまうといった事態も、私たちの生活のなかでときに生じている。

SNS上での文字や記号を中心としたコミュニケーションは、直接会って話すことに比べて、気楽で手軽で利便性が高いが、その分だけ失うものも大きい。それは、先述のポイントを繰り返すなら、対面ではおのずと取り入れられている豊かな手がかかり——たとえば、発話の際の口調、表情や眼差<sup>まなざ</sup>し、身振り、そして、互いが共有している場やその雰囲気といったもの——である。こうした手がかりを欠いたまま、時間<sup>ま</sup>に追われるようにコミュニケーションをおこなえば、誤解や炎上などの可能性もそれだけ高まるのは当然と言えるだろう。

それからもうひとつ、現在の社会が以前の社会と違うのは、《 X 》<sup>×</sup>ということだ。

直筆の手紙という現物だけが私信を送る唯一の手段であった時代には、その内容が第三者に知られる可能性は低かつた。しかし、現物をコピーしたり撮影したり、電子媒体でメールやメッセージなどを送ったりできるようになった現在では、意図的な暴露<sup>ばくろ</sup>であれ、送信先のミスなどの意図せざる事故であれ、その危険は飛躍的に高まっている。

それゆえ、特定の相手のみに向けて言葉を書き送ったつもりが、思わぬ人の目に留まってしまふ事態も頻発している。たとえば、特定の相手に送ったはずのメールが他人に転送されるとか、いわゆる「鍵」をかけて友人など特定の範囲の人々のみに向けて投稿した文章が、スクリーンショットなどの方法で保存されて、誰でも閲覧できるかたちで曝されるといったことだ。そうやって、誰かに対する悪口や、悪ノリで書いた下品な言葉、差別的な言葉などが、通っている学校や職場などに知られて問題となったり、場合によってはマスメディアなどに取り上げられて職や社会的地位を失ったりすることもある。

このように、私信が公的な発信と化してしまいやすい現在の状況を考慮するなら、言葉が一人歩きして制御困難になることに對するプラトンの懸念を、私たちはより深刻に受けとめなければならぬだろう。

もちろん、情報通信技術の発達が私たちにもたらしたことには良い面もある。先に触れた、気楽さ、手軽さ、利便性といったものはその一部だ。たとえば、いまや私たちは遠く離れ離れになった人と簡単に言葉を交わせるようになったし、世界中の人々と気軽につながれるようになった。

それから、直接に面と向かって発せられる言葉ばかりが生き、相手の深く揺り動かすわけではない。誰かが書いてくれたメッセージやメールによって慰められたり励まされたりすることもあろう。

また、言葉の一人歩きも、必ずしも害悪ばかりもたらすわけではない。本屋や図書館で手に取った本から、あるいは、ネット上でたまたま見かけた匿名の文章から、自分のこれまでの物事の見方が変わるほど感動を得たり、新たな発見をしたりすることもあるだろう。勇気を与えられたり、救われたりすることもあろう。それから、ひとつの作品が多くの人々の目に触れることで、新しい魅力的な解釈や創造的な読み解きといったものがより触発される、という面もあるだろう。

さらに、私信と公的な発信の境界線の薄さも、必ずしも悪いことばかり引き起こすわけではない。たとえば、個人的な手紙がその後の時代に公開され、文学的な価値や哲学的な価値が認められるようになった例は、古来枚挙にいとまがない。誰に向けて書いたわけでもない日記が、のちに素晴らしい文学作品として多くの人々に愛好されることすらあるのだ。

とはいえ、この章で見てきたのは、<sup>⑤</sup>これらの利点や積極的な可能性を加味しても、記憶の外部化と言葉の一人歩きに對するプラトンの懸念はいままなお有効であるということだ。いやむしろ、現代社会の状況を考えると、かつての時代よりも深刻に受けとめなければならないとさえ言える。

（古田徹也『言葉なんていらぬ？』（創元社）より）

注1・プラトン……古代ギリシアの哲学者。

注2・炎上……ここでは、インターネット上である投稿に批判的なコメントが集中し、收拾がつかなくなることを。

注3・LINE……スマートフォンやパソコンを使って、通話やメッセージのやりとりが無料でできるアプリケーション。

注4・スタンプ……LINEなどで使用する、小さなイラスト。

注5・スクリーンショット……スマートフォンやパソコンの画面をそのまま静止画像のデータとして保存すること。

問一、

1 4 には入ることとして適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。(ただし、同じものは使えない。)

ア、さらに      イ、やはり      ウ、それとも      エ、あるいは      オ、つまり      カ、では

問二、二重線部 a・bと同じ用法のものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

a 「より」

- ア、勉強するよりほかはない。
- イ、ここより先は立入禁止だ。
- ウ、会議は一時より行われる。
- エ、よりよい企画を提案する。
- オ、父親より背が高くなった。

b 「ながら」

- ア、話を聞きながらうなづく。
- イ、生まれながらの健康体だ。
- ウ、親友三人ながら合格した。
- エ、昔ながらの喫茶店に入る。
- オ、知っているながら答えない。

問三、波線部 A・B の本文における意味として適切なものを次の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

A 「枚挙にいとまがない」

ア、だいたい起きることだ

イ、多すぎて数えきれない

ウ、例を挙げるほどでもない

エ、誰もが知っていることだ

オ、詳しいことはわからない

B 「現に」

ア、身近に

イ、密かに

ウ、まれに

エ、実際に

オ、一部に

問四、( I ) に入ることばとして適切なものを漢字一字で答えなさい。

問五、傍線部①「想定外の事態に応答することができないという、孤立無援の制御困難な状態」とあるが、これはどのような状態だと言ひ換えられるか。「く状態。」に続くように、本文中から十字で抜き出しなさい。

問六、傍線部②「プラトンが懸念した問題は、現在では解消されたところか、より深まっていると言えるのである」とあるが、このように言える理由として適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、記憶の外部化がさまざまな方法で可能になったものの、記憶を引き出す方法も複雑になってしまったから。
- 2、記憶の外部化が文字だけでなく音声や映像でもできるようになったことで、情報が増えすぎてしまったから。
- 3、記憶を外部化する方法は音声や映像がメインとなり、本を読んだり文字を書いたりする機会が減少したから。
- 4、記憶を外部化する方法が増えただけでなく、外部化した記憶をいつでも利用できるようになってしまったから。
- 5、記憶は外部化したほうが効率がよく、頭の中に知識を蓄えておくことは無駄が多いと考える人が増えたから。

問七、傍線部③「特定の相手に対して発信するという小規模なケースでも重大な問題を引き起こしうる」とあるが、ここでの「重大な問題」とはどのようなものか。四十字以内で答えなさい。

問八、傍線部④「それ」とあるが、その内容を説明した次の文の空欄【1】・【2】に入ることばを、【1】は七字で、【2】は十字でそれぞれ本文中から抜き出さない。

【1】であるマークやスタンプなどを、【2】の手段として用いる行為。

問九、《X》に入ることばとして適切なものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、私・信・の・発・信・を・誰・も・が・で・き・る。
- 2、私・信・が・お・お・や・け・に・な・り・や・す・い。
- 3、私・信・が・炎・上・の・原・因・の・一・つ・だ。
- 4、私・信・に・は・危・険・性・が・潜・ん・で・い・る。
- 5、私・信・の・特・定・が・容・易・に・な・っ・た。

問十、傍線部⑤「これらの利点や積極的な可能性」とあるが、その内容として適切でないものを次の中から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1、書き残された言葉から、感動や勇氣、新たな発見を得る場合があるということ。
- 2、私信が、後の時代に価値のある文学作品として多くの人に読まれるということ。
- 3、通信技術の発達によって、一人歩きする言葉も生きたものになったということ。
- 4、直接会うよりも、気楽で手軽にコミュニケーションをとれるようになったこと。
- 5、遠く離れた人や世界中の人々とながりを持つことが簡単になったということ。

問十一、本文の内容と合致するものを次の中から二つ選び、番号で答えなさい。

- 1、プラトンの懸念は古代からずっと続いていて、社会の状況は本質的に変化していないといえる。
- 2、現代では過去より人間の記憶力も知力も弱まっているので、記憶の外部化は極力避けるべきだ。
- 3、文字で残る言葉は誤解や曲解が生じることもあるが、誰かの心をよい方向に動かすこともある。
- 4、コスパやタイパを主張する人は、記憶の外部化が言葉を制御する手段であると考えている。
- 5、生きた言葉の特性の喪失は、能力の低下や、残した言葉が誤解や批判を招くという問題がある。
- 6、プラトンの言葉が一人歩きするという懸念は、SNSの誕生によってはじめて現実のものとなった。
- 7、プラトンは生きた言葉の重要性を強調していたため、自分の言葉を文字で残していなかった。

